



♡♡♡③

米・ロサンゼルス  
6年在住体験  
平木 博美

## 「ママ、ごめんね」 手術後娘が一言 涙が滝のように

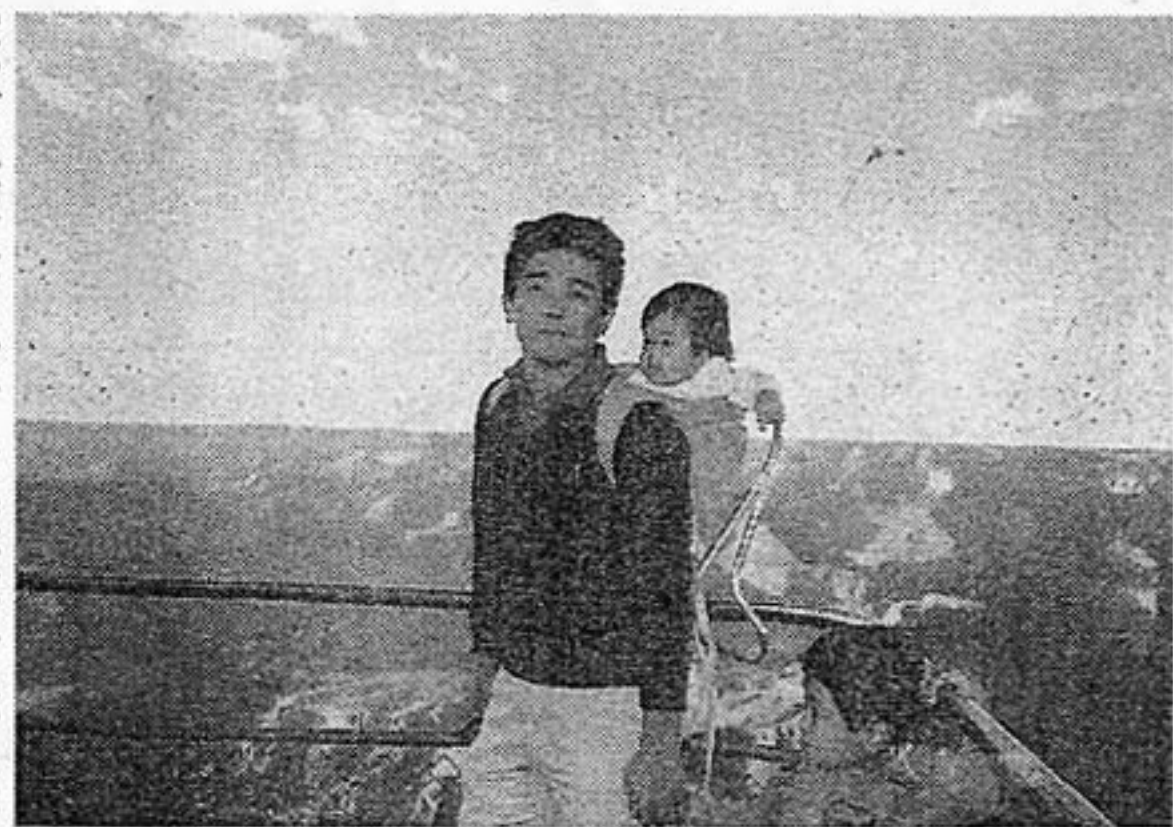
「ママ、ごめんね」  
五時間半の大手術を終えた香織が、病室に戻ってきたの第一声だった。

理由を尋ねると車の中で前を向いて座っているように、私がいつも話していたのに、ちょうど後ろを向いた時に事故が起き、そのため、香織一人だけが大きげをしたのだと思うと言った。翌日、会社も学校もある

のに家に帰れないのも、香織のせいだと自分を責める。六歳の娘のその言葉を聞いて、事故が起きて涙一つ出なかった私の目から滝のように涙が流れ始めた。全身包帯だらけだったが、足先が暑いと動かして

度もひとみをチェックしにやって来る。香織はのどが乾いたと言ったが、手術後の飲水はダメ

由に車を使って良いと貸してくれたというのだ。見も知らぬ人間に、何と温かい申し出たろうと、私も胸が



長男の健太郎ちゃんと二女の英理子ちゃん、それに運転していなかった平木さんのご主人は軽いけがですんだ(89年10月6日ケランドキャニオンで撮影)

が落ち着いたら、すぐに転院できるよう手配してくださった。自分の患者なら、いつ、どこで、何が起きようと責任を持って面倒を見てくれるアメリカの主治医のありがたさを身にしみて感じた。

入院三日目、香織の血液の状態が落ちてきたので、救急飛行機で転院することになった。同乗を許されるのは保護者一人のみで主人は二人の子供を連れ、グレイハウンドバスで帰宅することになった。病院で働くボランティアの人にバス停まで送ってもらい、最少限の荷物だけにしての帰路だった。

### 救急隊員が同行 担当医に報告も

転院には救急隊員が同行し、転院先の担当医に直接、病状報告書を手渡すまでは帰れないと言ったのを見て、責任の所在を明らかにするアメリカらしい一面だと思った。

全身五百針の大手術を終えた夜は、命は危なかったと聞いて、今生きている娘の顔を思わず見つめ直したが、生かされた大切な命を決して無駄にするまい、と母として決心した。

リハビリは厳しく、痛みで立てない娘をしたた激励し、座ったり立ったり、看護婦は一日中、指導してくれた。

日本では考えられないことだが、事故後六日目にして香織は退院することになり、消毒もリハビリもすべて母である私の責任になった。

監修

小木曾道子

## 3日後主治医の手配でロスへ転院

### いっどこで何が起きてても 自分の患者の面倒を見る

## ありがたいホームドクター

いるので聞いてみると、神経もすべてつないだので大丈夫という話だ。一生車いすを押してやる覚悟を始めていた私も一安心できた。主人にもすぐ連絡し、無事に手術が終わった報告をして、私も仮眠するため横になった。

しかし子供二人とも、頭部にはけがをしているので、脳に異常が出ないかを調べるため、看護婦が夜中に何

との説明で、小さな氷を口に入れてやる。

### 宿の人が車を 貸してくれた

眠れない長い一夜が明け、主人が病院に来て、うれいことがあったと言った。

宿を出ようとした時、従業員の女性が、事故で車が必要ならば不自由だろうから、自分の勤務時間中は自

いっばいになってしまった。下着の着替えやオムツの買い出しに主人が走った。

自宅から離れた場所での入院は、精神的にも物理的にも落ち着かず、家に帰りたい一心から、ロスの主治医(Home doctor)に

連絡をとった。休診の日だったにもかかわらず、香織の担当医と連絡をとってくれ、状態